

優秀賞（神奈川新聞社賞）

グラデーション社会

神奈川県立相模原中等教育学校 3年 ^{あおき}青木 ^{ゆうや}祐弥



「なんか虹の色多くない？おかしいよ。」私の描いた絵を見た友達は、このようなことを言った。その後、少し言い争いになったことを覚えている。私が幼稚園に通っていたころのことだ。

思い返してみると、幼稚園児の私は八色の虹を描いていた。日本では、虹は七色で描くことが多い。そのため、友達の目には私の虹が間違っているように映ったのかもしれない。

けれども、空にかかった虹を見てみると、はっきりと七色に分かれているわけではない。もっとあいまいな、グラデーションになっていることがわかる。そこに色の境界線を引くことによって、私たちは虹を何色かに分けて認識している。実際、虹の色の数は国や地域によって異なるという。

つまり、「色の境界線」の引き方で、虹は八色にも二〇〇色にも、何色にもなり得るのだ。そして、その引き方は人それぞれである。どの引き方が正しいというわけでも、間違っているというわけでもない。

そう考えると、私たちが暮らしている社会は、実は「虹」のようなものである。多種多様な人々、そして考え方が広がっているのだ。それらが互いに補い合い、重なり合うことで成立している。「グラデーション社会」と言ってもいいだろう。

そういったあいまいな社会の全体を理解しようとするのはとても難しい。しかし、理解できないと不安になる。そこで、私たちは「色の境界線」を引くことで安心感を得ようとしてきた。人や考え方など、様々なものごとをいくつかのまとまりに分けたのだ。色をはっきりと分けた虹は、簡単に描くことができる。そうやって私たちは、この社会を「ある程度」理解し、生きやすくしてきたのである。

しかし最近では、SNSで民族や性別など、特定の集団に対する差別的な言動を見かけることが多い。「〇〇人はこうだから駄目だ」とか、「男はこう」「女はこう」といった投稿などだ。他にも、障がいや見た目など、「特定の集団」は様々である。それらはたいてい主語が大きく、過度に一般化されている。

この背景には、一人一人の心の奥底に潜む「偏見」がある。特定の集団をひとくくりにして、勝手な印象を持

ち、決めつけている。それぞれが引いた「色の境界線」を妄信してしまっているのだ。

これは、差別に限った話ではない。もっと細かな、日常の会話や考え方においてもみられる。たとえば、私は鉄道が好きであるが、自己紹介で「鉄道が好き」だとすると相手の目が一瞬曇ることがある。どうしても、一部の過激な鉄道ファンのイメージが先行してしまい、「鉄道好き」全体に悪いイメージを持ってしまうのだ。だから、趣味の話になると私は少し躊躇してしまうことがある。このように、目につきやすい少数のイメージで「色の境界線」を引き、全体のイメージを固定してしまうことがあるのだ。

これはとても危険なことだ。自分が好きなものを「好き」だと言えない社会は、果たして生きやすい社会といえるのだろうか。

しかし、時には共通の「色の境界線」を引くことが必要になる。それが「ルール」である。一人一人がすべて違った境界線を自由に引いていても、社会が良い方向に向かうことはない。だが、ルールも絶対的なものではない。もちろん守らなければならないことには変わりはないが、時代によってその内容は変えていく必要があるし、実際に変わっていくのだ。

大切なのは、「色の境界線」を引くときにこの社会があいまいで、様々な境界線の引き方がある、ということ意識することだ。そして、そのあいまいさが社会を美しく、豊かにしているのだ。

だから、なにかを考えると、だれかと話すとき、思い出してほしい。この社会は「グラデーション社会」であり、様々な「色の境界線」の引き方があるのだと。